
死神の気まぐれ

時雨彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神の気まぐれ

【Zコード】

N4780F

【作者名】

時雨彼方

【あらすじ】

死神が突然夢の中に現れ死の宣告をする。それを信じるも信じないもあなたの勝手。でも、その死神は気まぐれにつき注意・・・。一話完結型の物においていこうと思つてます。死神についてはつながりがあるかもしれませんけど・・・

加納響の場合

田の前に小学1年生くらいの身長で顔は美少女、穏やかな笑顔を向ける少女が立っている。しかし、そんな風貌とは裏腹に全長にして3mはあろうかという大鎌を持ち白いローブを着ている。なぜ、そんな格好をしてしているのだろうと思つてゐると少女が笑顔で一言。

「あなたの生を頂きます。あと一日。そうしたら迎えに来ますよ。」

そう言つて忽然と姿を消した。

（変な夢を見た……）

男はベットから降り立ち上るとカーテンを開け朝の陽光に目を細めた。

男の名前は加納響かのうひびき。現在高校に通う17歳。家族構成は父母妹の4人家族。性格は至つて普通で、変わつてゐるところがあるとすれば時々幽霊のようなものが見えるくらいだ

（こつもの感じと違つけど、まあいいか。）

特に気にする風でもなく響は誰も居ない1階へと降り朝食を作る準備をした。響の家ではその日一日の家事全般は当番制になつておりこの日は響の担当だった。

一通りの食事の準備を終えると母父妹の順に起きて朝の挨拶を交わすとそれぞれ席に着いた。その日の朝食はトーストにサラダ、スクランブルエッグとコーヒーと実にシンプルなものだ。誰も食事には文句を言つことなく朝の談笑を楽しみながら食事を終えそれぞれの準備へと向かうためにリビングを出て行つた。

響は朝食の片づけをしてから学校の準備をしようと思つてテーブルに有る皿などを台所へ運び始めた。

一通り運び終わつたところで食器を洗おうとしてその手が止まる。目の前に夢に出てきたあの少女が居たからだ。響は少女を見つめたまま何も言えずに固まつている。

そんな響を見て面白かったのか少女はクスクスと笑うと話し始めた。

「加納響さん、おはよーいります。昨晚あなたの夢に勝手に出させさせていただきました。いきなりで困惑されるかもしれませんがあなたは今日限りで死にます。私はそれを届けるための死神とでも思つてください。」

そういうと少女はまたクスクスと笑い始めた。

響は何を言われてるのかまったく分らず硬直したままだった。

(死神?俺が今日死ぬ? いつたじどうこいつことなんだ……)

固まつたままそんなことを考えていると少女はまた話し始める。

「はい、私は死神です。こんな格好で驚きましたか?なにも禍々し

いだけが死神じゃないんですよ。」

クスクスと笑いながら話を続ける。

「それとあなたは今日死ぬ。これは紛れも無い事実です。なぜなら私が殺そうと思つたから。残念ですが今のところその考えを変えるつもりは微塵もありません。残念ですがあきらめてください。」

あ、でも～と間延びした声を出した少女は、

「私が心変わりするくらいの事が起きたら、考え方やいます。」

そういう少女は夢の中のときのように忽然と姿を消した。

響は何がなんだかわからず呆けていたが、母に話しかけられ我に戻ると「なんでもない」と言いながら片づけを済まし家を出た。

少し家を出るのが遅れてしまい道を走る響だがやはり昨晩と今朝の事が頭から離れない。

そういうじてこ内に学校に着きH.R.^{ホームルーム}が始まるギリギリで席についた。

「よう。ひびっちゃん、おそかつたじゃねーの？」

響が席に着くなり前に座っていた男の子が話しかける。

「ああ、ちょっといろいろあってな。それよりもかっくんがH.R.前に席に着いてる方が驚きだ。」

「俺だつて、たまにはえーんだよ。」

かつくん、と呼ばれた男の子は口を尖らせながら、失敬などといつ

態度を表した。

桔梗要。響とは小学生からの付き合いで親友とも呼べる存在。昔から響の体质を知つていてそのことについての相談に乗ることが多い。

「席に着け。HRをはじめるべー」

そういう担任の声にあわせて血席に着く生徒達。要是響きに「何かあったなら毎にでも話せ」と一言言つと前を向いた。

午前の授業が終わり毎になるときは弁当を響きの机の上に置いた。響きも自分が持ってきた弁当を机に置き一人同時に開け、食べ始めた。

「とにかくでよ。ひびっちゃんがHRギリなんて珍しいんだけど、例の関係でなんかあつたん?」

「いや、ん……」

響は要に話そつか正直迷っていた。

話せば巻き込んでしまうかもしない、それに死神なんて信じるだろ?か。いつもの幽霊話なら信じてもらえるだろ?がさすがに死神はきついかな、そんな事を思つていた。

「何も話さないならいい一ナビセ、困ったことがあつたら相談しろよ?」

「ああ、頼りにしてる。」

そういう二人はいつもの昼食の風景に戻つていった。

午後の授業が始まらしくして、響が、ふと校庭をみると外ではサッカーだろうか体育の授業をしている。いつもはあまり余所見をしない響だが今日はなぜかその光景に目を向けて離さない。しばらく、ぼーっと外を眺めていると急に周りから色が失われそれまで元気に走り回っていた生徒、教室内も自分ひとりだけになってしまった。

(な、なんだ!)

いきなりの事態に響は混乱したが聞き知った声が後ろから聞こえてきたため振り返った。

「加納響。そろそろ死ぬ準備はできましたか?」

少女はそういうと徐に持つていてる鎌を持ち上げた。響はそれを見て必死で叫んだ。

「あんたが心変わりするほどのことになんなんだよ!」

少女はキヨトンとして、何を言われたのか考へてるようだつた。
少しして少女は何を言われたのか分つたらしくウンウンと頷いて鎌を下ろし口を開いた。

「ああ、今朝言つたことですね。私が心変わりするほどの事ですか。

」

少女は何も考へていなかつたのかうへんと考え閃いたといつよう

にポンと手を叩いた。

「リリから、今すぐに飛び降りてくれたら殺しません。」

笑顔でそんなことを囁つ少女に、唖然としながら響は考えていた。

(俺を殺すために2階から飛び降りろって囁つてるのかそれとも飛び降りても死なない処置をしてくれるのか。)

正直学校の2階から飛び降りたところで足から落ちれば骨折程度で済むだろう。しかし、そのあと頭など打ち所が悪くて死んでしまうかもしれない。そんなことを考えている響に少女は一言囁つた。

「平気ですよ。飛び降りても死なないです。その後の生活はどうなりましたか？」
「ああ、飛び降りました。」

また、クスクスと笑うと返答を待っているのか少しの間何もしゃべりかけてこない。

(背に腹は変えられないか……)

そう考えると響は「わかった。」と言つて飛び降りる口を開く。そうすると少女は笑顔で消え周囲には色と音が戻った。

(やるしかないよな……)

暫くして、覚悟を決めた響はブランドに出た。そのとき授業担当から「どこへ行くんだ！」と言われたが無視をした。ブランドに出た響は手すりに手を置き、よつと気合を入れると手すりに座るよつな形を取つた。その行動を見ていた教師や教室内からは悲鳴に近い

ものが上がっていたがお構い無しだった。

「ひびっちゃん！ 落ちたら死ぬぞ！」

「かつくん、死なねえーよ。でも、一応救急車は呼んでおいてね。」

そういうと、響は他の人の制止を振り切り飛び降りた。

下の階で授業をしていた生徒は突然降りてきた人間に悲鳴をあげた。何事かと外を見た教師は啞然とした。そこには足があらぬ方へまがつていて頭から血を出し、誰が見ても絶命して生徒が横たわっていた。

「人間って不思議、助かると思えばなんでもやっちゃんだ。それに飛び降りてる最中は生きてるんだから間違った事言つてないよね？」

誰にも見えない少女は誰に話しかけることも無くクスクスと笑いながら姿を消した。

次に送る人の所へ行くために……

加納響の場合（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。
少しすつ更新しますのでよろしくお願いします。

鈴木崇の場合

田の前に小学一年生くらいの身長で顔は美少女、穏やかな笑顔を向ける少女が立っている。しかし、そんな風貌とは裏腹に全長にして3mはあろうかという大鎌を持ち白いローブを着ている。なぜ、そんな格好をしてしているのだろうと思つてゐると少女が笑顔で一言。

「あなたの生を頂きます。あと一日。そうしたら迎えに来ますよ。」

そう言つて忽然と姿を消した。

男はガバッと勢いよく飛び起きた。全身は汗でぐっしょりと濡れていってハアハアと肩で息をしている。

男の名前は鈴木崇。すずき たかし 髪は伸び放題でやつれた顔は生気が感じられなく仕事もしていない。家に引きこもり外に出ようとはしない、所謂、引きこもりといつやつだ。家族は両親との三人家族。

「ゆ、ゆめか……」

男は周りをきょろきょろ見回しながら呟く。

カーテンの間からは朝の陽の光が差し込んでいるが男には関係ないかのようにまた布団を頭まで被つた。

それから1時間ほどして部屋の前に人がやつてきた。

「崇、ご飯。置いておくからね。あと、ちゃんとお風呂には入りなさい。」

それは、崇の母親だった。しかし、崇は返事もせずにその気配が消えるのを待つ。

そして、階段を下りる音が聞こえたところで崇は布団からもぞもぞと起き出し扉を開けそこにあつた食事を部屋の中へ入れる。すぐにその食事を平らげると元の位置に戻し扉を閉めた。

「ババア、金だけ残して早く死んでくれないかな。」

そんな不吉なことをぶつぶつ言いながら崇は、パソコンを立ち上げた。崇にとつてパソコンでのネットサーフィン以外に娯楽は無かつた。

崇は5年前まではきちんとした社会人だった。営業実績も人並みにあり別段不自由も無く、どちらかといふと現在の自分のような存在を下に見るような事をしていた。しかし、ある日いきなりクビを通達されなんのやる氣も起きず、今に至る。

そんな、昔を思い出して度々苛立ち周囲の物を壁に投げる癖があった。今日も昔のことを思い出し壁に物を投げつけていた。

(くそ！ なんで俺がなんで俺が！)

数分それを繰り返していくとさすがに疲れたのかその行為をやめた。

そして少ししてネットサーフィンを再開しようとパソコンの画面に向かつたところ画面がつかない。それどころか周囲が全体的にいつもより暗く感じた。そして周りを見回すと部屋の片隅に見覚えのある一人の少女が立っていた。

(あ、あいつは夢に出でた……！)

その少女は素に一歩近づくとしゃべりだした。

「ほんにちは、鈴木崇。昨晩は夢に突然お邪魔してすみませんでした。いきなりですが、夢で宣言した通りに今から生を頂きたいと思いますがよろしいですか？」

そうこうと少女は鎌を振り上げたままゆっくりと近づいてくる。

「ちよ、ちよっとまつてくれ！ 意味が分らない！ だから、意味だけでも教えてくれ！」

半狂乱状態になりながら腕を振り回して崇は精一杯叫んだ。すると少女は鎌を降ろし説明を始めた。

「ああそうですね、いきなり生を奪われるなんて嫌ですもんね。簡潔明瞭に説明しますと私は死神あなたは今日たった今死ぬんです。これでいいですか？」

少女は簡単に要点だけを説明すると再び鎌を振り上げた。

「助かる方法は無いのか…？　まだ、まだ死にたくないんだ！」

崇は床に頭を付け必死になつて少女へそう問いかけた。少女はうんと困った顔をしてゆつくりと喋りだした。

「仕方ないですね、一つだけ提案です。もし、今日中に家族を全員殺害できれば私は生を奪いません。」

少女はまとうこと、答えを待つかのように口を開じ男を見つめた。

「だが、そんなことをしたら俺は捕まっちゃう。それじゃ、それじやダメじゃないか！」

それを聞いた少女はほとほと呑れたといった感じで話し出した。

「そんなことを恐れて生を手放すのですか？　まあ、いいですよ。ではわよくなら」

そういうと振り上げたままだった鎌を首へ降ろす動作をした。

「分った！　全員殺す！　それであなたに殺されないのなら……」

それを聞いた少女は満足そうに笑うと夢のときの様に忽然と姿を消した。

それを見た崇はすぐに行動へ移るために部屋を出た。

崇は階段を降りてリビングに入るソファーに横になつて寝息を

立てている母親を見つけた。熟睡しているのを確認すると起しげないようになつくりとキッチンへと移動した。

キッチンに入った崇は包丁を手に取った。その足でもう一度リビングに戻るとテーブルの上に置いてある花瓶を手に取り寝ている母親の頭を思い切り打ち付けた。ガシャンと言つ花瓶が割れる音とともに中に入つていた水と花が母親の頭にかかる。

その一撃で目を覚まさず母親は動かない。崇は只の気絶かその一撃で死んだのか確認するために脈を診たがまだ生きているのを確認した。生きているのを確認すると馬乗りになりめつた刺しにした。崇は何かに取り付かれたように何度も何度も返り血を気にせずに刺し続けた。

その夜、仕事から帰ってきた父親はリビングに入り驚愕した。血の海に横たわる妻を発見しその血の匂いで嘔吐した。父親は息子の安全を確認すべく息子の部屋へ入つた。そこに息子は居なく別の場所を探そうと後ろを向いた瞬間驚愕した。田の前には血まみれの包丁を振り上げ今までに自分を刺そうとしている息子が居たからだ。

崇はそんな父親を見下ろしながら一気に包丁を振り下ろした。しかし、それは肩に刺さつただけで重症を与えられてはいない。肩を刺された父親は痛みに耐えながら崇を蹴り飛ばした。

崇がよろめいてその場に倒れこむと父親はその上に馬乗りになり「おまえがあ！」と言いながら何度も顔を殴打した。

自分の指が折れ息子の顔が陥没し死んだのに気がつくと、自分のしたことの愚かさに身を震わせた。

「別に殺さなくてもよかつた……」

眩くように言い立ち上がると妻の手から包丁を奪い何かをブツブツ言いながらリビングに降りると、倒れている妻の横で包丁を首に当て自殺した。

それの一瞬始終を見てクスクスと笑いながら一人の少女が見ていた。

「言つたでしょ？　『私は』殺さないって……」

誰に言つたのでも無く、少女はクスクス笑いながら消えていった。次の人を送るために……

鈴木崇の場合（後書き）

なんか、ちょっと無理矢理かなあ・・・
何かご意見、ご感想ありましたら是非お願いします。

誤字修正と一部文の追加。

入江美穂の場合

田の前に小学1年生くらいの身長で顔は美少女、穏やかな笑顔を向ける少女が立っている。しかし、そんな風貌とは裏腹に全長にして3mはあろうかという大鎌を持ち白いローブを着ている。なぜ、そんな格好をしているのだろうと思つてると少女が笑顔で一言。

「あなたの生を頂きます。あと一日。そうしたら迎えに来ますよ。」

そう言つて忽然と姿を消した。

彼女はゆつくつと田を覚ました。ガタンガタンといつ電車の揺れる感覚でもう一度眠りそうになる。

（へんな夢……。でも、今の私には丁度良いかな。）

彼女の名前は入江美穂。^{いりえみほ}黒髪のロングヘアに細い縁無しの眼鏡を掛けている。その顔はどこか暗く精力を感じられない。化粧品の販売店に勤めている^{いじく}一般的な女性。

美穂は住んでいる東京から電車を乗り継いで目的の地に向かっている。彼女の向かっている場所は富士の樹海と呼ばれる場所だ。

(はあ、早く着かないかな。)

電車の窓の外はまだ薄暗く、朝を迎えてそれほど時間が経っていないなかつた。

美穂は大人しい性格で周りとなじむことが苦手だった。その為小学校から始まり24歳になり社会人となつた今でもいじめの対象として見られていた。美穂はそんな生活に嫌気が差し自殺をしようとした所である樹海を選びそこへ向かっている。

鞄の中には自殺に使うロープと遺書の書いてある手紙が入つている。

そんな鞄の中身をもう一度確認すると鞄を閉め再び眠りに着いた。

程なくして目的の地に着いた美穂は樹海の中を歩きずらそうに一步步と奥へと入つていった。その途中では花瓶に花が入っているものや未開封のビールの缶など供養のためのお供え物があった。

(私のためにここまで足を運んでくれる人なんているのかしら。)

そんなことを考えたがすぐに、誰も来るはずが無いと思いまど少し暗い気持ちになつた。

美穂が丁度よさそうな木の枝を見つけロープを準備していると後ろから声をかけられた。

「ここに立つ。」

ぎょっとして後ろを振り返ると夢の中でもた少女が立っていた。下は樹の根などでとてもまっすぐに立つて居られないはずなのに田の前の少女は不思議とまっすぐに立っていた。

「さきほどはいきなり夢にお邪魔して『めんなさい』。いきなりですけど、あなたの生を私が貰うわ。だからそんなロープ片付けてくれないかしら?」

少女は一礼してロープを指差すとそう言った。

「私、あなたに殺されなくても自分で死ぬからいいわ。その為に用意したのだし。」

美穂は自分でも不思議なくらい冷静に言った。

「そのロープ片付けてくれたら、苦しみも無くあなたといつ人間を殺せるのだけ?」

「本当にあなたは苦しみも無く殺せるの?」

「正確にはあなたはすこし迷つてすこし痛いかもしれないけど、耐えられない程ではないですよ。」

美穂はその言葉を聞いてロープを片付けた。なぜならどの自殺の方法にも必ず苦しみや痛みは伴つからだ。しかしそれも『すこし』で済むならと思った。

だが、美穂には一つだけ疑問が湧いた。

「そりいえばあなたつて……？」

「ああ、私は死神です。あなたの生をいただきにきた。」

死神と聞いて美穂は嬉しく思った。眞偽はどうであれ、その格好を見る限りでは十分それに見えるからである。そして本題に入った。

「じゃあ、私を殺してくれる？」

「いいんですけど、条件があります。」

「条件？」と美穂は思つたが話を遮らずに聞いた。

「今日中ことでも多くの人を殺してください。そつすれば殺してあげましょ！」

美穂はその条件をどうするか考えた。しかしそうに「どうせなら虐められた恨みを晴らしてからでも」と思い条件に従うこととした。

「分つた。その条件でいいですよ。」

「では、なるべく多く頼みますね。」

そうにっこり笑うと少女は忽然と姿を消した。それと同時に樹海の中に居たはずの美穂は入り口まで戻されていた。

美穂は家の近くの金物屋で包丁や果物ナイフなど刃物を購入すると、その足で自分の勤め先の店へと向かつた。

美穂の勤めている化粧品の販売店はそこそこの規模がありキープ時には20人程度のお客が入るほどだった。

そのキープ時を狙い美穂は店に入る。そうするといつも虚める先輩と同僚が裏へ連れて行き「あんたがこないから……」「どういつつもり……」等文句を言い出した。

美穂はそれを聞いていたかと思うと背中に隠していた包丁で同僚の顔をいきなり斬り付けた。斬り付けられた同僚はいきなりの事に何が起こったか分らず目を見開いていたが、そんなのお構いなしに美穂は同僚の腹を数回突き刺した。その光景を見ていた先輩は叫びながら逃げ出そうとするが美穂は包丁を持つていないうちの手で髪を引っ張り引き付けると首の動脈を切り裂いた。首からは鮮やかな鮮血が飛散りそれは壁や美穂を紅く染めていく。

二人の死を確認しても美穂は尚蹴りつけ「ざまあみろ」と言いながら何度も何度も斬り付け突き刺し自身を血で紅く染めた。

そうしているうちに悲鳴を聞き別のスタッフが駆けつけた。その血だまりに真っ赤に染まつた美穂を見たスタッフは驚愕しその場から動けなくなつた。

美穂はそれを確認すると彼女のもとへ歩き出した。美穂は「たすけて」と震える声で何度も助けを求める彼女を睥睨すると「嫌」と一言言い持っていた包丁をあたまに突き刺した。ガツッという音がしたが不思議と硬いという印象は無くそのまま刺さつた。

三人の死体が転がる光景もどうでもいいかのように一瞥するとそこから売り場へ足を向けた。

売り場では数名のスタッフと1~2人あまりの客が居たが美穂の姿を見て皆恐怖の悲鳴を上げた。

それは『ただの煩い雑音』にしか聞こえなかつた。そして逃げ惑

う人を捕まえては首を切り腹を刺し、機械のように殺していく。何分経つだろうか、その場に居て逃げ遅れた6名の死体を一警した美穂は叫んだ。

「お前らが全部悪いのよ！ 死ぬのは当然！」

そういうと高らかに笑い始めた。もつすでに自分が自殺をする、殺されるということを忘れていた。

そこにはもう『物静かで虚められ続けた美穂』は居なくその人格も崩壊していた。

そして美穂は通報を受けた警察によつて取り押さえられ逮捕された。

「ね、言つたでしょ。あなたという人間を殺してあげるつて。でも、私が殺したんじゃなくて自分が殺した形だから少しだけ嘘を言つちゃつたかも知れないけど……。」

聞こえては居ないだろう美穂にそう話しかけると、少女は次の送り人の下へと歩き出した。

入江美穂の場合（後書き）

「ご意見」「ご感想あつましたらよろしくおねがいします。」

蒼井楓の場合

田の前に小学1年生くらいの身長で顔は美少女、穏やかな笑顔を向ける少女が立っている。しかし、そんな風貌とは裏腹に全長にして3mはあろうかという大鎌を持ち白いローブを着ている。なぜ、そんな格好をしているのだろうと思つてゐると少女が笑顔で一言。

「あなたの生を頂きます。あと一日。そうしたら迎えに来ますよ。」

そう言つて忽然と姿を消した。

「バシャン！」と顔に当たる海水で防波堤に座る少女は田を醒ました。

「冷たつ！ 服濡れちゃつた……」

少女の名前は蒼井楓。あおい かえである離島に住む中学2年生。家族想い、友達想いで周りからの信頼は厚い。家族は5人家族で、父親、母親、中学3年生の姉と小学5年生の弟。

(何時の間にか寝ちゃったのか……。でも、変な夢みたなあ。)

楓は夜中に家の近くの砂浜や防波堤で海を眺めるのを日課としていた。いつもはその場で寝てしまうことなど無くある程度満足すると家に帰っていたのだがたまたま眠ってしまったらしい。

(疲れてるのかな。家に帰つて布団で寝なおそり。)

そう思つと楓はスカートについた砂を掃うとそのまま家に帰り、愛用のパジャマに着替えて寝なおした。

楓はいつも家族の誰よりも朝早く起きて朝食を作るのが日課だつた。この日も変わらず朝一番に起きキッチンに立つていた。鼻歌を歌いながら上機嫌に朝食を作つてゐる姿は實に愛らしい。

朝食を作り終えるころには家族がゾロゾロと田を見ましリビングのテーブルについた。父親はいつのもの様に並べられるまで新聞を読み、母親はテレビを付けニュースを見ている。姉と弟は一人そろつてまだ起き切れてないのか首を頻りにカクカク言わせている。

そんな何時もの光景を見ながら楓は、いつまでも続けばいいと心の中で微笑んだ。

田の前に楓の作った朝食の焼き鮭と白いご飯に味噌汁が出てくるとそれぞれ別のことをしてゐた家族は手を合わせて一緒に、いただきますと言つと食べ始めた。

朝食が終わりそれぞれ出勤や登校の準備を始める。

楓はいつも準備は先に済ませており朝食の片付けが終わればすぐに家を出れる形にしてある。その為いつも楓が姉妹の中で外に出るのが一番早く玄関先で待つてることが多い。

「いってきまーす！」

そういうといつもの様に扉を勢いよく開けた。その瞬間周りはまるでそこだけ時間が止まってしまったかのように静かになり色が無くなつた。

楓が驚いて周囲を見回すと目の前には見知った少女が立っていた。

「蒼井楓さん、おはよづじやこます。昨晩あなたの夢に勝手に出させていただきました。いきなり困惑されるかもしませんがあなたは今日限りで死にます。私はそれを届けるための死神とでも思つてください。」

いきなりそんなことを言われて困惑している楓を見て死神と名乗つた少女はここにこ顔で付け足した。

「でも、死なない方法が1個あります。それは私のお願ひを聞いてくれることなのですが、聞きますか？」

楓は混乱する頭を一生懸命に動かし整理し、答えを出した。

「死なないで済むなら教えて……」

震える声で答えたそれを聞いた少女は満足そうに頷く。

「分りました。それは貴女の大切な人を全員殺せばいいですよ。簡単でしょう？」

そういうと少女は、また来ますと言つて忽然と姿を消した。

(大切な人を全員つて……)

考えていると後ろからバシン！と勢いよく叩かれ我に返った。後ろでは姉と弟がどうしたんだと言った顔をしていたので、努めて明るい笑顔で、なんでもないと答えた。

楓の家から学校までは徒歩20分ほどの距離にあるのでいつも姉妹や途中で会う友達達と談笑をしながらいつも学校へ行く。

楓の住んでいる島では中学生以下の子供が23名しか居ないため小学生と中学生は同じ教室で勉強をしている。とりわけ小学生のが多いため中学生は勉強をしにいくよりも勉強を教えている方が多いのだが。

楓達が教室に入ると小さな子達があそぼーと言いながら足に纏わり着く。楓や姉は子供が嫌いなわけではないので先生が来るまでの間遊んであげていた。

暫くして、朝の朝会の時間になつたのか教師が教室に入り挨拶とその日の連絡事項を簡潔に話した。その話が終わるとすぐに授業に入り各自机に教科書とノート筆記用具を出して勉強を開始した。

楓も数学の教科書とノート筆記用具を出して勉強を始めた。勉強を始め少しして朝の事を思い出す。

(大切な人全員……)

教室を見回し生徒と教師の顔を見て考えた。その日は一日そのことが頭から離れず結局勉強に身が入らないまま帰宅することとなつた。

教室を出てしばらく歩くと朝のように周りから色が消え姉妹や他の生徒達も消えてしまった。

楓は返答を聞きに来たのだと直感するとその姿を探した。探していた少女は目の前に会われた。

「答えは決まりましたか？ どうします？」

その言葉を聞いて楓ははつきり答えた。

「今日一日、ずっと考えました。私にはやっぱり大切な人は殺せません。その大切な人を殺すくらいなら自分が死んだ方がいいです。」

そう答えた瞬間少女は手に持っていた鎌を振り上げた。

（やっぱり、殺されるんだ……）

そう思つて目を瞑つた。

どれくらい経つただろうか、その瞬間がまだ来ないのを不思議に思い楓は目を開けた。

そこには鎌を振り上げている少女の姿は無く変わりに色が戻り前を歩く低学年の子供達と少し先に行ってしまった姉妹達がいた。呆然と立ち尽くす少女だったが弟に促されて小走りにその後を着いて行つた。

「うわざわめー、初めて拒否されてしましましたあ……」

やじまこじつもと雰囲気ががらりと変わり歳相応子供らしい声で泣きそうになつている白いローブを着た少女が、田の前に居る漆黒のローブに身を包んだ長身の20代前後の男に縋り付いていた。

「あらあら、それは残念でしたね。次からまたがんばればいいのですよ。」

男は優しい笑みで少女を見下ろすと頭を撫でた。しかし、少女はその優しさが引き金になつたのか泣き出してしばらへ男の中で泣いていた。

蒼井楓の場合（後書き）

「J意見」J感想等「Jありがとうございましたらお待ちしておつまむ。
読んでいただきありがとうございました。」Jわざこました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4780f/>

死神の気まぐれ

2010年10月9日21時52分発行